

フレーベル會



佛拾覺卷
第拾號

フレーベル會規則

第拾壹卷第拾號目次

○圖畫科の衛生に就いて

文學士 菅原教三

○幼稚園に關する諸問題

佐々木吉三郎

○栗の話

竹島茂郎

○夏休後の幼兒(其一)

野口ゆか

○夏休後の幼兒(其二)

(其二)

小向きみ

○幼稚園に於ける室内裝

藤五代策

○隨感

安井哲

○幼稚園の改良(スタンレーホール)氏

文學士 倉橋惣三

○機嫌のよしあし

倉橋生

- 第一條 本會ハ幼兒保育ノ改良發達ヲ圖ルナ以テ目的トス
 第二條 本會ハフレーベル會ト稱シ東京ニ置ク
 第三條 會員タラントスルモノハ幼稚園ニ關係アルモノ又ハ幼兒保育ニ萬志ナルモノニシテ會員ノ紹介ヲ經ベシ
 第四條 會員ハ本會ノ經費トシテ一ヶ月金拾錢ヲ醸出スベシ
 第五條 今聞名望アル人ニシテ本會ノ事業ニ裨益アリト認ムルモノハ特ニ請ヒテ客員トナスコトアルベシ
 第六條 總會毎年四月廿一日之ヲ開キ保育ニ關スル演説、談話、保育參考品幼兒成績物展覽、會務ノ報告、幹事ノ選舉等ヲナス
 但シ會日ハ會長ノ意見ニヨリ之ヲ變更スルコトアルベシ
 第一 一
 保育ニ關スル演説、談話、協議、實驗等ヲナス
 第二 一
 組合會 會員中特ニ或ル事項ヲ研究セントスルモノヲ以テ組織ス
 但シ別ニ組合規約ヲ定メテ會長ノ承認ヲ經ルモノトス
 第一 一
 綜誌發行毎年二月、六月、十月、十二月ノ第二土曜日之ヲ開キ
 前項ノ外本會ノ目的ニ裨益アリト認メタル事件
 第七條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク
 第九條 會長 一人 會務ヲ總理ス
 幹事 一人 會長ヲ補佐シテ會務ヲ掌理ス
 評議員 若干人 會長ノ指揮ヲ受ケ會務ヲ分掌ス
 第八條 會長ハ客員中ヨリ推薦スルモノトス
 第十條 會長、幹事、評議員ハ會長ノ特選トス
 アルベシ
 第十一條 本會ハ必要ニ應シ特ニ委員ヲ設ケ又ハ書記ヲ雇入ルルコト
 更スルコトヲ得ス
 本會ハ必要ニ應シ特ニ委員ヲ設ケ又ハ書記ヲ雇入ルルコト
 とめて振替貯金ヘ御拂不下されば直に雜誌を發送致します。
 一冊郵稅共金拾一錢
 一冊前金郵稅共六拾錢
 ○拾二冊同金壹圓貳拾錢
 ○郵券代用一割增

購讀の申込

(振替口座東京)
 (一七二六六番)

本誌を購讀なされたき方は會費一ヶ月金十錢の割合で一ヶ月分をまとめて振替貯金へ御拂不下されば直に雜誌を發送致します。

第十卷第一十號

圖畫科の衛生に就いて

文學士 菅原教造

一、圖畫教育の意義

圖畫を生理學的に研究すると云ふことは、兒童教育上に餘程大切なことであるのに、歐米諸國に於いても、其の研究が十分に發達して居るとは云へないので、我が國にあつても、坊間行はれて居る圖畫教育の著書で、此の點に觸れて居るものは極く稀れであつて、甚だ遺憾な次第である。今、私の紹介しやうとする説は、多く亞米利加のバーナム(Burnham)氏の意見であるが、我が兒童教育家の参考となる點が決して渺くはないと思ふのである。

バーナム氏は此の研究の必要を力説して、「圖畫の生理學上の立脚點が決つて居ない爲めに、種々拙惡な教授法が行はれ、其の弊が惹い



て言語の發達を妨げて居る點が尠くない。」と論じて居る。實理學の上から考へても、兒童の思想や感情を忌憚なく外部に表すこと、例へば怒つた時は、怒つた感情を偽らずに顔に表すとか、嬉しい時は嬉しい表情をするとか、恐い思をした刹那には、其の感じを直ぐ外部に表すと云ふやうな習慣を養ふことが大切なことである。これは日本で、兒童には殊に必要であつて、我が國では古い道徳思想から來て、喜怒哀樂の情を顔に表はさないことが、武士のたしなみであるとか、人の修めねばならぬ道であるとか云ふやうな誤つた考へから、表情といふことを非常に卑んで來たもので、例へば「お腹が減いても、飢うない」と云つた千代秋の千松の如きは、武士の典型であり、修養の極致であるかのやうに考へられて居たもので、其の弊が、微細な人間の感情を尊ぶことを知らないで、徒らに之れを卑むやうな習慣を作り、一方には機能の發達を害して居る點が多いのである。日

本人が一般に西洋人に比べて、顔や動作に表情の鈍いのは、全く此處から來た弊である。それでは何故に人の感情を尊び、之れを外部に表すことをおもんじなければならぬかと云ふことは、後に説明することにして、兎に角、兒童の感情を尊ぶといふことが、眞て兒童を尊ぶといふことになるのであるから、總て兒童に課する運動神經の訓練といふものは、直接に内部思想の表出を助けて行くものでなくてはならぬ。で、圖畫教育も同様の目的から出て居るものであるから、之れに依つて兒童の思想や感情を表すやうに努めねばならぬ。

二、思想發表の手段

兒童の偽らざる思想や感情は、其の自發的活動に最も能く現はれて来るものであつて、例へば喜怒哀樂の情が顔色に現はれるなども其の一である。兒童は乳兒の時代を過ぎて、自由に歩いたり、駆け廻つたりするやうになると、自分の思想や感

情を發表するのに、泣いたり、身振りをしたりするやうな表情の仕方と違つた、新たな方法をとるやうになる。第一に馬であるとか、犬であるとか、犠であるとかいふやうな動物の歩き方を真似たり、其の聲を真似たりするのは、皆、動物に就いての知識なり、考なりを發表する手段である。第二に來る方法は、言語に依るものであつて、實物から取つた寫生でも、想像で作り出したものでも皆、お話などで表すやうになる。第三は手の動作で思想を發表する方法である、即ち紙細工などは其の一つである。此のやうに、いろ／＼違つたやり方で思想を發表するやうになつてからも、最初の身體を動かして自分の考へを發表する方法は、矢張り其の儘に續けて行くもので、この第一の方法は纏て生涯の心的生活中に著しい關係を及ぼして來るものである。

かう云ふ思想發表の方法と云ふものは、餘程季節の影響を受けるもので、夏は紙細工のやうなものである。

斯様に兒童の運動と云ふものは、取りも直さず思想發表の一手段であるから、最初兒童に課する遊戯は、勿論自發的遊戯で、次に體育的、若しくは戯曲的遊戯に移らなければならぬ。そして繪畫の中には矢張り、自發的、體育的、戯曲的の差別が表はれるものである。

三、圖畫教育の目的

圖畫の教育は何を目的とするものであるかといふことは、これ迄にいろ／＼な方面から論せられて居るが、多數な論者の歸する處は、美術教育の

のは、餘り好まないで、動物を現す場合でも、多くは果物や野菜でそれを作るものである。又、夏は兒童の戯曲本能が充分に表はれる折が多いもので、お馬ドウ／＼と云つたやうな、餘念な馬ごつこに樂しい夏の一日が過ごされるのもそれである。

手ほどきと云ふ點と、其他、視力と運動神經の啓發と云ふことである。然し生理學上から論する場合は、圖畫を思想發表の一の機關と見て、兒童の思想や感情を外部に發表する爲めに、圖畫を課するといふことが主要の目的となつて居る。それ故に、生理學上の目的には、圖畫の有害部分を避けやうとする消極的の意味と、思想發表の一方法と云ふ積極的の意味との二面がある。で、第一の消極的目的が、教育實際家に取つて直接の關係があることであるから、先づ此の點に就いて少しく述明を試み度いと思ふ。

四、衛生上の注意點

圖畫の授業を行ふ場合の法則は、習字の場合と餘程似通つた所があるけれども、思想發表の手段としての圖畫は一般に習字の先きに來るものであるから、衛生上の點に就いては、殊更に深い注意を拂はねばならぬ。

先づ圖畫教室内の注意としては、(一)椅子と机は兒童の身丈に適當したものであること、(二)兒童の身體と手の位置が正確であること、(三)鉛筆は長いのを要すること。(四)兒童の目は机と黒板から適當の距離を保つこと。(五)黒板に書く繪は單純のものを選んで、お供の餘分の圖を多く書かぬこと、(六)光線のハツキりしない場合には授業を見合すこと、(七)教室内には人工燈火を避けること。(八)若し止むを得ぬ場合には室内的所々に澤山の燈火と、生徒の机に各々一個のランプを與へること。(九)色鉛筆を使ふ場合は、それを口に入れたり、指尖についた色をなめたりすることのないやうに注意すること等であるが、一般に兒童は他の課目よりは圖畫の時間に興味を持つもので、その爲めに自分の位置なり周圍なりを忘れて騒ぎ易いものであるから、姿勢を正確にして授業することが餘程大切である。更に二三の重要な點を項を分けて略説すれば、

(一) 運動神經の訓練
総の運動神經の訓練は、要するに兒童の腕と手を發達せしめる目的を満足せしめると云ふ點と、それから兒童の本能から來る思想發表を充分に遂げさせると云ふ點、即ち兒童の自發的活動の範圍に制限すべきものであるから、繪畫もまた、其の範圍を出て、無暗に精密な繪や、六ヶしい畫を課してはならない。これは生理學上からも、又心理學上からも同様の法則が立つのである。

(二) 初學年の時期

圖畫の授業は何歳から始むべきであるかといふことは、いろいろ異つた意見が行はれて居て、獨逸では規則的に此の科目を課するのは十歳からで、佛國では獨逸よりも比較的早く課することになつて居る。然しそれよりも大切な問題は、其の仕事の種類と方法とであつて、若し其の仕事が單純で、自由で、而も其れを課する時間が短かけば、幼稚園の兒童に課しても、決して差支はない

のである。先きにも述べたやうに、兒童は自發的繪畫の上に、自分の思想や感情を有りの儘に表すものであつて、其處に大なる教育的價値と、衛生上の意味がある譯である。

又、藝術的能力と云ふものは、幼少の折に既に現はれて來ることが、何も變則であるといふことは決して出來ないが、唯こゝに注意すべく點は、其の能力は成人か教へ込んだのではない。兒童の自發的のものでなければならぬといふことである。それであるから、圖畫の法則や技巧を教へると云ふやうなことは、決して十歳や十二歳の兒童に課すべきものではないので、さう云ふ意味の教育は、寧ろ兒童の繪畫に對する興味を害するばかりで、何の利益にもならない。バーネス (Barnes) 教授は、兒童が繪畫の技巧に興味を持つやうになるのは、餘程後のことであるといふ事を證明し、且つ初年期の兒童に繪畫の法則を強めるのは、繪畫の先天的興味を破壊するものであると論じて、

大に之れを戒めて居る。これに依つて觀ても、八歳乃至十歳の兒童に課する圖畫は、飽く迄も自發的のもので、且つ子供の自由に任せて置くべきものであることが、理解される。

五、圖畫教育の順序

圖畫の授業は最初、どう云ふ圖から始めなければならぬかといふ事も大切な問題である。兒童の自發的活動は最も教育的な活動である、偉大な自在な、そして生理的な活動である。時期は極めて短いけれども、非常なる熱中を以て働き、そして注意の深淺の差が著しい活動であつて、この活動の產物は即ち生活である。行為である。これに反して成人の體育は、飽く迄も形式的、數學的、機械的であつて、幾何學的な技術から始まつて、静止及び習慣を現すものである。

實際、在來の教授法といふものは、先づ直線から始めたもので、一般的の練習には、二つの點を結び付ける直線を書くことであつた、然しながら、進んで考へると、直線は決して自然的な線ではないので、如何なる美術家と雖も、完全な直線を書くことは極めて稀れである。故に曲線の方が寧ろ自然に近い線であると云はなければならない。それは腕の構造からして、曲線の方が書き易い爲めである。故に「濫塗」の如きは兒童の最も得意のものである。クック氏(Cooke)によれば、濫塗は兒童の自由精神の發動する結果であつて、自然なる行爲である。従つて大に價値のあるものである。そして兒童の書く線は直線ではなくて曲線である。而も弓形のやうな半徑の短い圓の弧ではなく、徐かに圓曲した、即ち半徑の極めて長い圓の弧である。それは腕の構造と運動とに影響される爲めであつた、生物本來の性質から来る自然の結果である。と論じて居る。實際に濫塗の場合には、腕全體の

運動が自然的に行はれるもので、氷滑のやうに滑かな表面を、急に運動することが樂で、のろく動くことが不自然であるのと同様である。

六、

圖畫發達期の區分

リュツケンス氏は、児童の圖畫科に就いて、非常なる用意を以て研究され、それから推して、圖畫發達期の徑路を四期に分つことが出来ると云つて居る。それは、(一)濫塗の時代、(二)藝術的錯感の時代、(三)自意識の時代、(四)青年期の時代である。此の四つの時期には、各々其の特長を有つて居るものであるから、少しくこれを説明しやうと思ふ。

第一期——は凡そ四歳から五歳までの間であつて、此の期は單に或る圖を画くと云ふ動作、それ自身に興味を持つて居るので、即ち繪畫の爲めの繪畫であつて、其の他に何等の目的も意識しては居ない。此の期には、濫塗の外には何

物も現はすことが出来ないけれども、然し濫塗の中には自分の全能力を發揮して止まないもので、其の產物は懲て將來の才能を豫言するものである。

第二期——は約十二歳乃至十四歳までの間であつて、藝術的錯感即ち想像の時代である。児童は自分の頭に起つた想像を書き出すことに満足して居て、自分の眼に映じた外界の事物を借りて来る必要を感じない時代である。故に此の時期は、殊に子供の自由に任せて置くことが必要で、若し此の發達期を無視して、徒らに或る一切児童得意時代を破壊することになるので、圖畫階梯の根本的缺陷と云ふべきである。今假りに、圖畫教師が子供に教へて「よく樹や花を御覧なさい、そして見たまゝを御書きなさい。」と云つたとする。子供は教へられたまゝに花なら花を見て、自分の頭だけでは、見たまゝ

であると思つたことを書いたとする。そして其の作物が實物と非常に違つて居るといふことを知つた時には、自分の技巧の拙なさを耻ぢてしまつて、自分はもう何も書くことが出来ないものだと考へるやうになつて、書くことが嫌になつた。それと同時に天賦の藝術的錯感が消滅してしまう。で、要するに此の時期には、飽くまで児童の想像を貴んで、其の想像力を發達せしめるやうに努めることが必要である。

第三期は——十二歳若くは十四歳から、十五歳若くは十七歳までの間に、自意識の時代、又は批判の時代とも云ふべき時期である。然し思想發表の一方法としての繪畫の妙味といふものは、自分の繪画かうと思ふことを自由に書くことの出来る子供だけに残されて、他の普通の児童は多く此の時期にあつて、其の妙味を失つて行くものである。そしてバーンス教授の説に依ると、子供は十三歳若くは十四歳の後になつて、繪畫

であると思つたことを書いたとする。そして其の作物が實物と非常に違つて居るといふことを知つた時には、自分の技巧の拙なさを耻ぢてしまつて、自分はもう何も書くことが出来ないものだと考へるやうになつて、書くことが嫌になつた。それと同時に天賦の藝術的錯感が消滅してしまつた。で、要するに此の時期には、飽くまで児童の想像を貴んで、其の想像力を發達せしめるやうに努めることが必要である。

第四期——は青年期の時代である。獨創力の發生する時期で、児童期の全盛時代とも云ふべき時である。而も製作に努力するといふこと自身が面白いのであつて、此處から専門に入ると否との境が生ずるのである。

七、視力

繪畫は一般に児童の眼を害ふやうなことはないものである。然し視力の訓練は他の訓練よりも先きに受けねばならない。何故と云ふに、色盲といふことは児童の間に、屢々見る處であつて、歐米諸國の児童研究家は、此の事實を證明して居る。亞米利加の小学校児童中で、色盲の男児が四分強、女児が六毛強の比をなして居ると云ふことであつ

て、其他多くの色覚研究會は皆、兒童の色盲が意外に多數なのに驚いて居るといふ有様である。

色盲には全然色の知覺を有たないものと、一の色と他の色との區別を付けることが出来ない色盲との二種がある。又、或る場合には色彩感覺の薄弱な兒童もあるが、然し全部の色盲といふものは極めて稀である。視力の研究は先づ色盲の研究から始めなければならない、此の點に就いては、此の小論文の中で盡すことが出来ないから、それは更めて論ずることとする。

八 器具

圖畫に用ふる器具は極めて簡単である。長い鉛筆若くは畫筆と、適當な用紙と、それだけである。黒板の理想的代用品としては、白板の上を墨で書くことが、近頃になつて發明されて來た。石盤を使用する場合には、成るべく品質のよきものを撰び、且つ常に清潔にして置くことに注意せなければ

ばならぬ。

色「チヨーク」を使用する場合には、殊に十分の注意が必要である。色「チヨーク」の中に含まれて居る硫酸の有害分子に就いて、ドクトル、ガフキー（Gaffey）氏は恐るべき實例を示して居る。或る大學の一教授が病に罹つて、暫くの間職を退いて居て、漸く快復を見た。だが再び其の職に復すると、先きの病が再發したので、其の大學生の教室を試験すると、教室の黒板に、色「チヨーク」で澤山の圖畫が書いてあつたので、いろいろ研究の結果、硫酸の中毐であることを發見した、尙ほ同氏の言に依ると、綠と、明るい青の「チヨーク」は硫酸の分量が比較的薄く、桺、殊に藍微色の「チヨーク」は極めて顯著な害毒を有つて居ると云ふことである。

手本を使用するといふことは、全く過渡時代の遺物であつて、聰明な教育家は、も早や手本などは使はない、若し強いて使はなければならぬ場合

は、十分衛生上の點に注意して、（一）児童の眼を傷けないこと、（二）餘りに細密な書を書かない手本を撰ぶことが必要である。圖畫の教育には、上來述べ來つたいろいろな目的の外に、清潔の習慣を養ふ方便としての利益もある。それは單に圖畫の教室を清潔にして置くといふことばかりではなくしに、それと共に、標本なり、挿畫なり、鉛筆なりを清潔にして置く習慣をつけることも必要である。

九、表情と藝術の生理的價値

曩きに、児童の感情を有りのまゝに外部に表すことが必要であつて、其の目的の爲めに立つて居る圖畫の教育も亦、飽くまで子供の感情を表出す自發的繪畫でなくてはならぬと云つたが、それでは何故、さういふ習慣を付けることが必要なのか、人間の感情を偽らすに表すといふことが、吾の生活に、どういふ意味を有つて居るものであ

るかと云ふことを少しく論じて見やうと思ふ。然しこれは詳しく云ふと、藝術論なり、心理學上の感情論なりに涉らなければならぬので、反つて繁雑になる恐れがあるから、此處では極く大意をかいつまんで、お話することに止めて置く。例へば、吾々の胸に鬱積した精神上の苦痛であるとか、怒りであるとか云ふやうな感情を、忌憚なく他人に語り明したり、又はそれを文章に書き表すことが出来れば、その爲めに心の苦みや怒りの情が、自然と消えて行くもので、俗に怒りっぽい人は冷め易いと云ふのは、即ち自分の感情を直ぐ外部へ現して仕まうから、後に殘るもののが少い爲めである。これに反して、さういふ手段をとることが出来ないで、何時までも自分の思つて居ることを胸に溜めて居る人は、それだけ苦痛や怒りの時間が永い譯で、自然と自分の頭を痛めることが多いのである。それが極端にゆくと、病的感覚になつたり、機能を害したりするやうになる。よしそこ迄にな

らないとしても、少くとも人間の性質を陰鬱な傾向に導くと云ふことは疑ない事實である。

總て吾々の心に醸酵した藝術衝動を、詩であるとか、繪畫であるとか、小説であるとか、演劇

であるとか云ふやうな活動、即ち製作といふことで、自分の興奮した感情を發散せしめて、それに依つて自分の藝術的満足を得ることが出来るので、前と同様の理由から出て居るものである。

獨逸の詩聖ゲーテが自分の内的煩悶から来る暗黒な感情と、そして自分を滅さうとする病的感情と、生きやうとする生の執着心との間に起る心の苦みを、詩作に耽ることに依つて、僅にそれを救つて居たと云ふことは、此の場合の最も適切な實例であつて、ゲーテの作で有名な『ウエルテルの悲は』即ち其の結果である。それは獨りゲーテに限られたことではなく、總て偉大な詩歌は、皆同様の動機から出来るものである。

藝術品を製作するといふことから得る慰藉の内

容には、創作の完成された刹那の歡喜なり、自分の作を社會に發表し得たといふ社會的本能の満足なり、又は模倣の本能を満足すると云ふやうなことが、前に云つた要素に附帶して居ることは、疑ひのない點であるけれども、主な部分は感情の發表から来る満足である、それであるからヒルン氏(Hirn)の云つたやうに、總の藝術は自分の感情を發表する必要から生ずるもので、飽くまで自分の満足を得やうとする活動である。従つて藝術の價值といふものは、藝術それ自身にあるもので、その他に、例へば勸善懲惡の爲めであるとか、人類の理想の向上を助ける爲めであるとかいふやうな、他の方便として立つて居るものではないので、もう一步進んで云ふと、自分の満足の爲めの行爲であるといふことが、やがて大なる教育的價値を有することになる。これは先きに云つた子供の

自發的活動が、それ自身に大なる教育的價値を有つて居るといふこと、同様の理由である。

これは藝術を生理學上から見た議論であるけれども、この理論が同時に、子供の感情を有りの儘に發表する自發的活動を尊重せなければならぬと云ふ理論の説明にすることが出来るのであつて、これに依つて、子供の運動神經の訓練は、皆思想や感情の表出を助けるものでなければならぬと云ふことが理解されると思ふのである。

十、餘論

自發的の繪畫が思想や感情を發表する手段であるといふことは、一方から見ると、子供のそれに對する興味を具體的に表したものと見ることが出来る。又、さう云ふ思想なり。興味なりは自發的活動の中でも、殊に遊戲と圖畫の上に最もよく現はれるもので、これ兒童や、野蠻人や、狂人の畫いた自發的繪畫で十分に證明されるものである。或る場合には、習字や言語よりも、繪畫に依つて、さういふ人の脳裡に起つた現實の思想を知ること

が出来、又、男兒と女兒との間や田舎の子供と都會の子供との間には、一般の能力なり、智力なり、特殊な藝術的才能なりに、どういふ差異があるかといふやうなことも、これに依つて知ることが出来るのである。

圖畫が子供にとつて、思想や感情を發表する極く普通な手段であることは疑ひなき點であるけれども、然しそれと共に、紙細工であるとか、粘土細工であるとか、更らに轉じて、駆歩であるとか戯曲的な動作であるとかいふやうな、いろ／＼な形式でそれを表すものであることを忘れてはならぬ。唯、繪畫がその代表的な形式であると云ふに過ぎない。

要するに運動神經を訓練する方法なり、手段なりの選擇は、一に子供の自由に任せて置くべきものである。(完)

幼稚園に關する諸問題

佐々木 吉三郎

これまで、大分長いお話を致しましたが、今回は、結末として、幼稚園に關する希望、十ヶ條を述べて、おしまひとする事に致しませう。

第一、第一生理學心理等の専門家を入れて兒童研究を盛んにする事。幼稚園に關する雑誌には、學者を見るべきやうな論文がないと云ふ事を、度々耳にして居りますが、これは、畢竟根本的創作的研究がないと云ふ意味であらうと思ひます。此の點から考へたならば、必ずしも、幼稚園の雑誌ばかりではなく、小学校でも、中學校でも、教育の全般、或は、教育以外の文藝などにも云へることであるかは知れませぬが、兎も角も、批評は批評であるからして、これは、虚心坦懐を以つて、聞いて置く必要があると思ふ。此の頃は、實驗心理学の實驗教育學だのが、盛んになつて、来て、

折々、幼稚園や小學校にも、生徒を借りに来て、幾つかの問題を立つて、其の統計表を拵へて何か、

これまでの人の、ちつとも知らなかつた事柄でも、發見したかの如く、思つて居る人は、無いでない。又は、問題を依頼して統計を取つて貰つて、御本人は表の上でのみ想像して御座るものもある様である。實をいへば、こんなのは、實驗といふことに、まだ眞面目な人々ではないので、吾々始終、小供を扱つて居る者から見ると、あんな人達は、一分間や二分間の問答を種にして、よくもあんなに、羽を生やしたり、根を生やしたりして、大膽な論斷をするものであると驚くのみである。で、私は、一度位やつて見て、直ぐに結論をするやうなことは、あまり賛成しない。始終観察して居つて、それを、數量的に表はす爲めに、實驗を行ふと云ふのならば、贊成をするが、一寸

じつは、お子さんを拜借と云つたやうな實驗的研究は、非常に危險なものであると云ふ事を警告して置きた

い。其故に、此所で、専門家を入れよと云ふのは、一時依頼して來ると云ふ意味でなくして、幼稚園の職員として始終小供に接せしめようと云ふのである。さうすれば、専門の學術に深い人程、平生の觀察も、一層徹底するわけで、アノ子は、大體こんな性質、コノ子は大方こんな性質であると云ふことが分つて居つて、實は殆ど、統計など取る必要はない。毎日小供を觀察して居るのは、やがて毎日統計を取つて居るのと同じ事で、紙にこそ書かないが、頭の中には「あの子はかう」この字はかう」と云ふ事が、立派に書かれてあるのである。其れを、人に示すのに、數字的統計を取ると云ふ様になつて、始めて統計が生きて来る。平生の觀察と云ふものは、なか／＼貴いもので、數年受持つて居た教師が、一人々々の小供に對する判断は、實に正確なものである。随分、吾々の學校にも、一寸借りに來ると云ふ實驗家はあるが、問の出し方が不都合であつたり、小供から見れば、

見馴れない人が、分らない言葉で、ものを云つたりするやうなことから、案外、其の結果が妙になつて仕舞つて、低能児の方が却つて立派な成績を表はして居て、平生出來の良い子が、不結果を來して居ると云ふやうな場合もあつた。又、或る中学校の生徒は、其の問ひ方が氣障であるとか、人を馬鹿にしてをるとか云ふ事をいつて、申し合せてよい鹽梅な事を書かうではないかと云うて書いて出したと云ふ話もある。兎も角も、一寸借りに來た實驗の中には、受持の教員等が眉をひそめて、あんな結果を統計して何が出来るかしらんと、冷笑して居るやうなものも少なくない。寧ろ、こんな宿かりのやうな學者でなしに、虎穴に入らずんば虎兒を得ずと云ふ筆法で、自身から、幼稚園の仕事に關係して長い間の觀察をやつて、然る後に、實驗的研究なり何なりするやうにしたいと思ふ。それでこそ、本當の學術的研究が出て來る事であらうと思ふ。近時、東京女子高等師範學校の附屬

幼稚園に、倉橋文學士の如き、兒童心理の研究を専門とする人が關係して居らるゝ様であるが、これは、最も愉快とするところで、かかる例を、成る可く普及させたいものである。

第二、保母養成を盛んにすること。これまで、保母の養成をあまり盛んにやつて居るとは思はれない。これは、幼稚園が盛んでないからと云ふ理由に依ると思ひますが、自分の考へでは、保母養成所から出た人が、同時に、立派な小學校教員たるの資格あるやうに、程度を高めさへすれば、いくら養成しても、ちつとも心配が入らないと思ふ。少なくとも、高等女學校の卒業生位に、二年位やる程度にしたならば、小學校教員として、師範卒業生に劣らないばかりでなく、兼ねて、幼兒の扱ひを知つて居るからして優良なる女教員と見做されるやうになるであらう。又、色々な點から、母親に代つて世話をしなければならぬ筈の保母と云ふものは、小學校の學科を授ける教師より、劣つて

よい筈はない。寧ろ、老熟なる母親の代理として、少しも遜色の無いやうな人物を要する譯であるから、師範學校の卒業生が、更に保母養成所に一年以上も入つて、卒業すると云ふやうになるのが、至當であらうと思ふ。若し、程度の低い保母が入用であるなら保母養成に、尋常科高等科と二分してもよからうと思ふ。兎も角、幼兒の取扱ひ方を知つて居る教員が、どんく養成されなければならぬと思ふ。

第三、既に述べた通り、小學校に幼稚園を附設するがよからうと思ふ。獨立の建物に、僅か二百坪の運動場を附けるよりは、小學校の運動場に連續させて、二百坪の地面を擴げた方が、小學校の爲にも幼稚園の爲にも、どれ丈便利であるかわからぬ。建物の方も、諸種の器具機械も、同様の筆法で、類る經濟的に出来る、家庭から考へても、兄や姉が、弟妹を連れて行くと云ふ便利もある。かたぐ私は、幼稚園を、小學校に附設する事を

希望するものである。西洋では、高等女學校に附設してあるところもある。これは、女學校の生徒が、母親となる前に、幼兒を觀察し、幼兒の世話をすると云ふ事の上に、非常な便益があるからと云ふ事である。要するに適當な場所に附設して、其の數を増し、わけて貧民労働者等の幼兒にして家庭に於ては、世話の届かないと云ふ方のものを成る可く獎勵して出させ、市町村其他國庫等から、相當な補助金を出して、其の事業を助けると云ふ風に組織すればよいと思ふ。

此處までは、重に幼稚園の組織に関する方面の希望でありましたが、此れからは、幼稚園の内部の仕事に就いての希望となります。

第四 身體を本位とす可し。此れまでもすでに申し述べた積りであります、幼稚園の自慢とす可と云ふところは、幼稚園に來ない小供よりは、血色、肉付がよく、何れも立派な體になつて居ると云ふ點でなければならぬ。従つて、往々復へりも成る

可歩かせ、運動を獎勵し、若し眠くてたまらなければ相當の設備をして書齋をさせるもよろしい。又、貧民の小供等である場合には、西洋各國のやうに、牛乳を飲ませたり、お晝飯を食べたりするやうな設備が出来れば、元より理想的である。汗ばんだならば體を拭いてやるとか、すべて衛生上出来る丈の事を盡くして、體操遊戯等も、あまり小六ヶ敷い神經ばかり痛めるやうな事をさけて、のんびりした丈夫な子を理想のものとするがよい。

第五 室外を利用する工夫をこらせ。幼稚園は、名の如く園であるべきもので、幼稚室では無い。隨分、大都會には、輪廻の美を極めた建物もあるが、碌な庭を持たないと云ふところがある。小供は、まるで、雛子か鳥屋の中に入れられたやうなもので、碌な自由な運動が出來ないと云ふ事になる。私は本當の建物が、よし小さくても、又質素でも、寧ろ、庭を廣く取つて、成る可く、外で日を暮すや

うにさせたいと思ふ。それには、先づ潤葉樹の樹木を植ゑて、夏は日影を掩へ、冬は日當りを害しないやうにするがよからうと思ふ。其の上、出來る事ならば、日當りの方だけを明け放しした、土間の小屋を掩へ、一寸した雨降りや、風の餘り烈しい日などには、其の土間の中で、遊んで居ると云ふやうな事が、餘程面白い。英國あたりではそんな設備をして、其の周圍に、鳥を飼つて居たり、植木鉢を並べたりしてをるが、これでこそ、小供は自然の中の小供であらうと思ふ。

第六 自然を愛せしめよ。此れも、英國を始め、外國の幼稚園では、餘程注意して居る事であるが、日本には、其程よく行つて居らぬやうに思ふ。

將來の保育養成所では、是非、動植物の飼養栽培法を十分に心得させ、小供等をして、小鳥や金魚や植物の手入れに、一二時を知らず識らず過ごしてしまふと云ふやうにし度いと思ふ。掛圖に就いて問答をしたり、玩具をいちくつたりして居るより

ないやうにするがよからうと思ふ。其の上、出來る事ならば、日當りの方だけを明け放しした、土間の小屋を掩へ、一寸した雨降りや、風の餘り烈しい日などには、其の土間の中で、遊んで居ると云ふやうな事が、餘程面白い。英國あたりでは

は、どれ程上品で、又、健康に有益であるかは、智者を俟たずしてわかる事であります。

第七 直觀材料も成る可く、自然物たるべし。小供は、自分で運動して駆け廻る丈でなしに、五官を使つて、外物を能く觀察すると云ふ事が、一つの仕事で、幼稚園の任務の一つであるが、私は、前條に述べた主意からして、直觀材料も、成る可く、自然物であるのを希望する。フレーベルの恩物などは、餘り有難いものとは思はない。學校園に行つて、植物を觀察し、飼つて置く動物に餌をやつたり、色々の世話ををして、其處で觀察するやうにならねば面白くない。然るに、今日の幼稚園は、果して小供らに、どれ丈の植物の世話をさせ、どれ丈の動物を擁護させてをるか。

第八 製作も可成自由にすべし。小供は、外物を直觀する事が必要であるのみならず、自分でやつて見、取り扱つて見、作つて見るに依つて、本當に、其の物に親しみ、本當にその事柄がわかるので、

ある。構はすにおける、彼等兒童は、色々なものをつかまへて見たり、色々なものを捨てて、其れを以つて、或は彼等の實用に供し、或は、眞似事をして悦んで居る。飯事などを見ても、土をこねて饅頭を捏へ、練つた土でお皿や茶碗を捏へ、或は紙を刻んで紙幣を捏へる。此れは最も自然なる技能的、藝術的活動である。そこで、幼稚園の事を論ずる者は、或は衝動の整理だと、本能の指導だとか云ふ通り、餘り此方で考へ過ぎた事をしないで、成る可く彼等が必要を感じ、彼等が希望を有するやうな事に就いて、知らず識らず、色々な経験を重ねると云ふやうに仕向けていたと思ふ。

従つて、餘り人爲的な、技巧に過ぎた事をやつて、斯様な製作品が出来ましたよなど云うて、自慢や廣告の道具に使つたり、心ない父兄を瞞着するなどは、慎しむべき事である。小供は、其様なに、精巧なものを作る必要は無い。自然の發達に従つて行けばよいので、幼兒に向つて、妄りに競争的

ある。構はすにおける、彼等兒童は、色々なものをつかまへて見たり、色々なものを捨てて、其れを以つて、或は彼等の實用に供し、或は、眞似事をして悦んで居る。飯事などを見ても、土をこねて饅頭を捏へ、練つた土でお皿や茶碗を捏へ、或は紙を刻んで紙幣を捏へる。此れは最も自然なる技能的、藝術的活動である。そこで、幼稚園の事を論ずる者は、或は衝動の整理だと、本能の指導だとか云ふ通り、餘り此方で考へ過ぎた事をしないで、成る可く彼等が必要を感じ、彼等が希望を有するやうな事に就いて、知らず識らず、色々な経験を重ねると云ふやうに仕向けていたと思ふ。

第九 早熟を招くなれ。能く、幼稚園を批評する人は、どうも、幼稚園にやると、小供がこせつて、大人を切り詰めたやうになつていけない。始めは手細工などを器用にやつたり、口のき、やうが怜憐めいて居る爲めに、一寸効能がある様に思はれるが、少し経つと、却つて發達が止まつて仕舞ふと云ふやうな事を云ふ。斯る批難は、能く聞くところのものであるが、事實は必ずしもさうではなくからうと思ふけれども、今日の多數の幼稚園は、設備が不完全で、碌な庭のないためか、又保姆の不注意のために外でやるやうな仕事を考へなかつたりした結果、狹苦しい部屋の中には入り勝になり、さて部屋の中へ入つて見ると、何十人とか云ふ小供を、只放つて置いたのでは、騒ぎ廻はつて悪戯をするに過ぎなくなるのと、今一つは、子供

に、獎勵をする必要は無い。又從つて、教師が餘計な手傳などをして、折角の教育的に意味のある仕事を臺なしにして仕舞ふ必要はない。

第八 早熟を招くなれ。能く、幼稚園を批評する人は、どうも、幼稚園にやると、小供がこせつて、大人を切り詰めたやうになつていけない。始めは手細工などを器用にやつたり、口のき、やうが怜憐めいて居る爲めに、一寸効能がある様に思はれるが、少し経つと、却つて發達が止まつて仕舞ふと云ふやうな事を云ふ。斯る批難は、能く聞くところのものであるが、事實は必ずしもさうではなくからうと思ふけれども、今日の多數の幼稚園は、設備が不完全で、碌な庭のないためか、又保姆の不注意のために外でやるやうな仕事を考へなかつたりした結果、狹苦しい部屋の中には入り勝になり、さて部屋の中へ入つて見ると、何十人とか云ふ小供を、只放つて置いたのでは、騒ぎ廻はつて悪戯をするに過ぎなくなるのと、今一つは、子供

が飽いて仕舞つて到底、三時間も四時間も續くものではない。そこで、先生やむを得ず、遊戯とか唱歌とか、何か掠へるとか、室内の仕事を多く課する。さうして見ると、遊戯も毎日同じものでは面白くない。唱歌も段々異つたものを教へなければならぬ事になつて、知らず識らず、教へ過すと云ふ事が起る。同じ歳頃の小供を、家庭に於いたならば、三時間や四時間はさて於いて、一時間も三十分でもお稽古事のやうなことはなくて暮す小供を、幼稚園と云ふ所に通はし爲めに、何か、学校めいた様な仕事をして、日を送ると云ふ事に漏れぬ方であると思ふ。

第十 良習慣の養成所たれ。此れは申すまでもない事で、各家庭に、勝手に遊んで居ると違つて、多勢のお仲間入をして遊ぶのであるから、意地悪るをしない、自分の勝手ばかり言ひ通さない、

規律正しくする、教師の教へに従順になると云ふ様な、色々の良い習慣を付けるやうにしたいものである。又、小供相應に自分で出来る事は、成る丈自分でするやうに獎勵をしなければならぬ。お付きを連れてだらしない風をして歩く様な幼稚園は一から十まで何でも大人の手で入らざらん世話ををして、行き届いた幼稚園を自分で出来て居るなどは、言語同斷であると思ひます。

以上は、素人の私が只、思ひ浮んだ事を、お話し文で、大抵は、既に、氣の付いてある事や、實行されてある事であるかも知れませんが、折角の御申越しでありましたから、兎も角も申し上げて見たわけで、長い間、貴重の紙面を汚した事は、誠に恐縮の次第あります。下手の長談議も

此れで、いよいよ千秋樂に致します。(完)

栗の話

竹島茂郎

外よりは手もつけられぬ要害を
内より破る栗のいがかな。（古歌）

空晴れて氣清き秋の日和には、一日を山に暮らすもまた興あるへし。子供等は栗の實を見付けたる時は、我先きにと小枝を折りとりて、まだ開きもせぬいたゞしき要害を、手に血をにじませながらもううち破りて、中の實をもぎ取るは興あることに相違なきも、黄ばみたるいがの大さく開きて、海老茶色の美しき實が、吹けば落ちん風情あるを、ゆすり落して、草の間落葉の下などに貌をかくせるを、拾ひ集むるは更に興あるべく。裏の山に大きな栗の木ありて、朝な々其の下に落ち散れる實を我先に拾はんものと、宵の中よりあすの朝は母と共に起き出で、拾はん程に、是非起してよと約束して、薄暗きあしたのそらに眼をこすりこ

一一〇

すり足もと覺束なく、大木のもとに駆け出すなどは何と興あることにはあらずや。桃栗三年と云つて、栗なぞは甚だ生育早き植物にして、實生のが三年にして既に實を結ぶものなれば、幼稚園等にも之を植ゑて登園を樂ましむるも一工夫ならん。栗の葉は霜と共に落ち散りて、蔭深かりし森も初冬の光斜にさし込みて、乾き切れる栗の葉が小さき子供の足に高き響きを起さしむるも面白し。栗に「おほぐり、ちうぐり、しばぐり」の三通りあり、「しばぐり」は「かちぐり」と呼び、甚だ縁起よき名にして、凱旋の式には缺くべからざる品なり、「かちぐり」の實は小粒にして、薄皮を取る事甚だ面倒なるも、味最もこまやかにして、上品なり、「おほぐり」は又丹波ぐり、料理ぐりなど呼びて、極めて美事なる「くり」なり。

栗の材は濕氣に遇ふも容易に腐らざるがゆゑ、鐵道の枕木として甚だ大切な品なり、又栗の炭は堅くして火力強きがゆゑ、鍛冶屋等の使用に適する

し、樹の皮よりは單寧と云ふ薬品を取りて染料及び鞣皮用となす事を得べし。効用多き植物なり。

「くり」に近きものに「しひ、かし、くぬぎ、なら」等あり、何れも雌雄異花にして、雄花は細長き穗の形をなし多數集合して人の眼をひけとも、雌花は小さくして苞にてつゝまるゝがゆゑ注意せらるゝこと少し、子房が熟して果實となる頃には、苞は大きくなりて此の果實を包む、之を殻斗と呼び、此の類の植物をまとめて殻斗科となす。「かし」の實は小さくして殻斗は茶碗形をなし、「なら」の實は「かし」の實を長く大きくしたるが如く、「くぬぎ」の實は所謂「どんぐり」とて殆んど球形の直徑三分位の大さり、「しひ」の殻斗は囊状にして「くり」のは所謂「いが」なり。

殻斗科植物は凡て木本にして、材は薪炭用に宜しく、「しひ、なら、かし」等の材は又椎茸を作るに適す、瓶の栓に用ふる「コルク」(木栓)は「くるくがし」と呼ぶる、種類の樹皮にして、スペインに

産す、但し我國四國九州及び臺灣に産する「あべまき」(こくるくぬぎ)も其の樹皮は「コルク」となすに適す。我國は明治四十年に於て凡五十萬圓、四十一年に於て凡三十九萬圓、四十二年に於て凡二十三萬圓のコルクを海外より輸入したり。

○子供の権利

「子供の権利」といふのは児童研究に熱心な田村直臣氏が近著の表題である。一寸聞くと多少荒立つたやがましい書名であるが、要するに子供の爲を切に思ふ熱心から、子供の友として社會に教へんとする主張に他ならぬ。二十九の問題に分けていろいろの方面から子供の爲に斯うして貰ひ度いと思ふ著者の注文と其の理由とが書いてある。文章も平易な極く通俗の小冊子であるが、一般家庭に奨めて極めて有益な書である。

(定價五拾錢、京橋區尾張町警醒社發行)

夏休後の小供

其一 野口幽香

永いお休は年に三度あります。が、お正月のお休は学年の終りに近く、子供も慣れて居る時ですのに、休後は大分困るのがあります。暫くは回復に骨を折ります。四月の休は大きな子供は出でしまつたあとで小さなの許りになりますから、此時も一寸あと戻り少なからず骨が折れるのであります。所が夏休私の處では先づ正味六十五六日は休みますので、私共でも幼稚園を忘れた様になります。子供には嘸永い感じがしましようが、一方では此永い幾日は、子供の身體の上にも亦心の上にも、變化を認める程、發達するものと見えまして、夏休後は存外困難の少ないのが、毎年の例になつて居ります。處が本年、多年の例にはづれまして、子供が妙になりまして、異口同音不思議だ

と申ました。それは子供が一向活動しませず（皆様はあなたの所はいつだつて不活潑じやないかといはれるでしようが）注意が亂れて遊戯をさせて見ますと、先導者は重くてく子供が少しも自由に動きません、さればとて別段泣く子が多いといふわけでもなく、全體がグタグタして刺撃に感じないと申した風。其原因を皆で考へましたが、どうしても當年の氣候に關係して居るとより思はれませぬ、今年の様に休後いつ迄も暑い年は餘りありませんが、今少し涼風の吹きのを樂しんで居ります、併し氣候計り待つても居りませぬ、これをなほす方法は、私共はいつも共同遊戯をさせます、毎日の様に「マーチ」やら「スキップ」やら又は種々の歌の伴なふ動作など、時間は短くとも熱心にといつた風にさせます、今日は始まつてから一日めになりますが、稍回復したと認めて參りました、尙夏休前後の子供の體重の増減を一寸左に記しましよう。

休の前後に計る事を得た子供五十四名の内	体重の増加	三十九名	最大一キロ、〇五〇均下
したるもの	体重の減じ	十五名	最小一キロ、〇五〇均下
たるもの	夏休後の幼児に就きまして、感じた事を、一つ	八〇〇均下	、五〇〇均下
たるもの	二つ申述べて見たいと存じますが、勤怠と云ふ事	、五七〇均下	、三七〇均下
たるもの	は能く人の常に云ふ事でございまして、勤と云ふ		
たるもの	方は、中々油斷の出来ませぬことで、やゝともす		
たるもの	ると、怠と云ふ方に傾き易いやうでございます、		
たるもの	これは大人の上にもあることで、餘程注意致しませ		
たるもの	んと、怠の癖はつき易いものでござります、大人		
たるもの	の事は暫く措きまして、幼児の上について、是を		

其二 小向きみ

考へて見ますのに、人間將來に於て勤怠の何れに
か定まるは、蓋此幼稚園時代の態方如何による事
と存じます、尤も好んで大切の子供を怠り者にす
る人もございませんが、愛と云ふ事の爲には、不
知不識の間に、子供をわるくする事がないとも限
りません、今夏休後の子供に就て、調べて見ます
のに、家庭に於て非常に大切にされて居る幼児が
種々の手段を以て漸く幼稚園に馴れ、夏休前など
は一日もお休をした事なく、朝も食事がすむや否
や早く々々と女中を、せきたてると云ふ風でござ
いました、さて七月下旬から八月一ぱいと云ふ永
いお休みがまゐりました、夫もまた、く中にすぎ、
久しう振で、幼稚園がはじまりました、そしてあの
位幼稚園が、好きだつた子供は、一向顔を見せま
せん、必らず病氣でもして居る事と想像して居り
ましたが、一週間を経ても、病氣届も出ません、
だん／＼調べましたら、病氣でも何でもなく、只
家庭にて、我儘を云つて遊んで居たいと云ふ風に

變つてしまつたと云ふ事が、分りました、之を知つた私共は、實にがつかり致しました。

さて此原因は、色々有る事でございませうが、夏休は、幼兒の身の上に取つては、暫く勤務のお休

でござりますから、いくらか心もゆるむでございませう、其上避暑とか海水浴とか云ふ驅で或は小

田原に、熱海に、箱根に、出かけます、目に見るものは、珍らしいものばかりで、廣々とした海上に、蒸氣船が煙を吐て走つたり、大きな親船は白帆を孕ませて、往來したり、釣する海士の小船は木の葉の如く、目に見るもの耳に聞くもの、皆永き夏の日も、なほ短いと云ふ風で暮します。

さあ此時が、子供の取扱に注意を要することであり非常に、むづかしいのでございます、元より保養といふことを目的とする所でございますから、平生規律正しく、躾をして居らつた方も、幾分か手綱をおゆるめになります、子供の方では何と

なく、それが愉快になる、夫ばかりならよいけれども、避所地等にてはお客様等餘り入つしやいませんから、お母様もお暇である、竹やも常よりも、比較的お臺所が、ひまである、自然母様が付切りで、お相手をして下さる、女中もお側を離れないで、遊んで呉れます、お忙がしい時何を云つてもお返事をして下さります、女中はどんな我儘でも、皆通させて呉ります、此所へお祖母様でも入つしやらうものなら、實に大變な事で、此時は子供の極樂世界でございませう。

いかに慈愛に富んだ保母、如何に設備の行届いた幼稚園であつても、とても此家庭の力には叶ひません、從て此力は、幼兒に善用する時は、其効果は著しく見ゆるもので、悪く用ひても亦其結果はあり／＼と顯はれます。

尤もぐわんせなき子供に、規律だの勤怠だの云ふことを求めるのは、不自然なることでございま

すが其周圍をとりまく大人が、常に其心持で、子供を取扱つて行つたならば、所謂いはず語らずの内に子供に、うつるものだらうと存じます。

いかに避暑地が面白くても、幼稚園が始まる頃には歸らなければならぬもの、いかに家庭が面白くても、幼稚園に行くべき時は、必ず行くべきもの、と云ふ風に仕向けていたら、二三日もたてば、又幼稚園が面白くなつて喜んで来る様になるものでござります。

前申上げました子供は、早速保護者を呼出して

忠告しました、幸に申した言を容れて、

其翌日車に載せて、祖母様同道で、参りました、

不機嫌な顔をして、なかなかお室にはいりません、び出しました、祖母様が歸つても、さがしも致しません、保母も一生懸命に譽めてやりまして、明日も亦何々をして遊びませうねー、と云ふ風に約束をして別れました、其翌朝は早く登園して、樂

しさうに遊ぶ様になりました、その後はお休み致しました事がなくて、私共も先一安心致しました。

三つ子の魂百迄とか申ますが、實に其通りで、幼稚園時代が最大切な時で、時に怠ると云ふ習慣が付きますと、小學校中學校女學校と進むに從てます／＼甚だしくなつて参ります、モー此迄來るとなか／＼矯正するのが困難でございます。幼稚園に御關係の、お有になる方は、かういふ御經驗が定めし有になる事と存じます。

會告

當十月常集會左記の通り開催致し候御綠合せ御出

席願上候

一、日時 十月十四日(第二土曜日)午後一時三十分

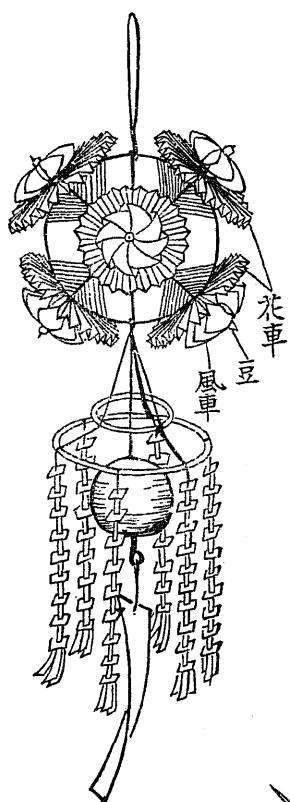
一、會場 東京女子高等師範學校附屬幼稚園
一、講演 齋藤斐章君

幼稚園に於ける室内裝飾品の作り方

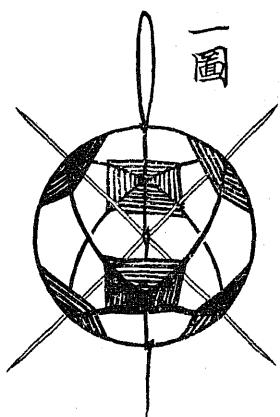
藤五代策

一、風鈴の揃へ方

これは、麦稭と、紙と、竹と、豆と、糸と、鳴。



一圖



徑より三四寸長い骨竹を三本切り取り、その兩

端を錐のやうに尖らして真中に突き刺すのです、そして提げ緒をつけて置くのです、提げ緒は上の骨竹ばかりに結びつけて置きますと折れます

から、上でも、真中でも、亦、下でも結んで、上下から引つ張つても大丈夫にして置くのです。

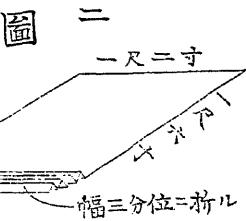
子とで揃へるので、圓のやうに、胴と、花車と、風車と、下りとから出来て居るのです。

(胴)は(一)圖のやうに作るので、提灯の骨竹の大きいのでも使って、曲尺で直徑五六寸位の輪を

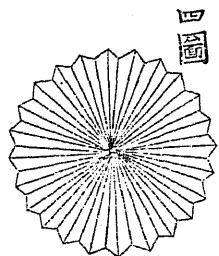
(花車)は六つ要ります。清帳紙の色紙(日本紙の稍厚い手工紙)ならば丁度工合がよいです。

同じ大きさに三つ揃へ、それを嵌め合せて、十文字になつた所を何れも麥稭で組むのです。それから胴の直

他の色紙ならば、長さ一尺六寸幅、一尺二寸の長方に切り、これを(一)圖の



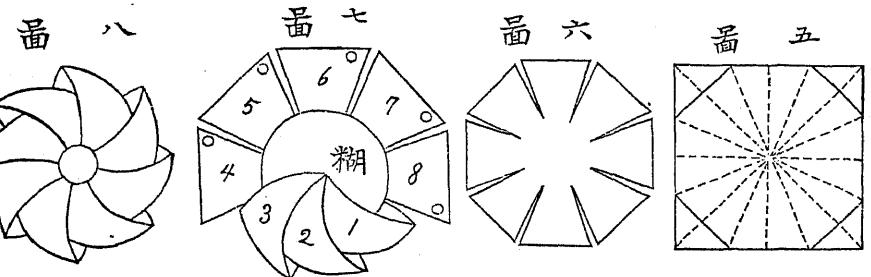
三圖



四圖

(風車) これも六つ要ります。花車の色とよく配合する色紙を三寸四角位に六枚切り取り、これを夫々(五)圖の點線の如く十六等分に折り、そして四隅を切り落しますと八角になります。それか

うに折り疊んで、疊んだまゝ、二寸づつに切りますと丁度六つ取れます、そこでそれ／＼(三)圖の如く一端に糸を通して極緩く結び、糊をつけ、圓く廣げて貼ります。



ら、別の紙を直徑七八分位に圓く切り、(六)圖の眞中に乗せて貼付の臺とし、(七)の如く、○印の角に糊をつけて番號の順に貼ります。お仕舞の八番目のは、一番目の下に、少しもぐり込むやうに貼るのです。そして裏表共中程に小さな圓い他の色紙を貼ると(八)圖のやうになります。貼り上げたのは、ふくらんで居ねばなりません。

中の方に糊がついて裏表がひとつき合つたり、押しつぶしたりしてはなりません。糊が乾いたら錐で眞中をつき通し、串孔をあける

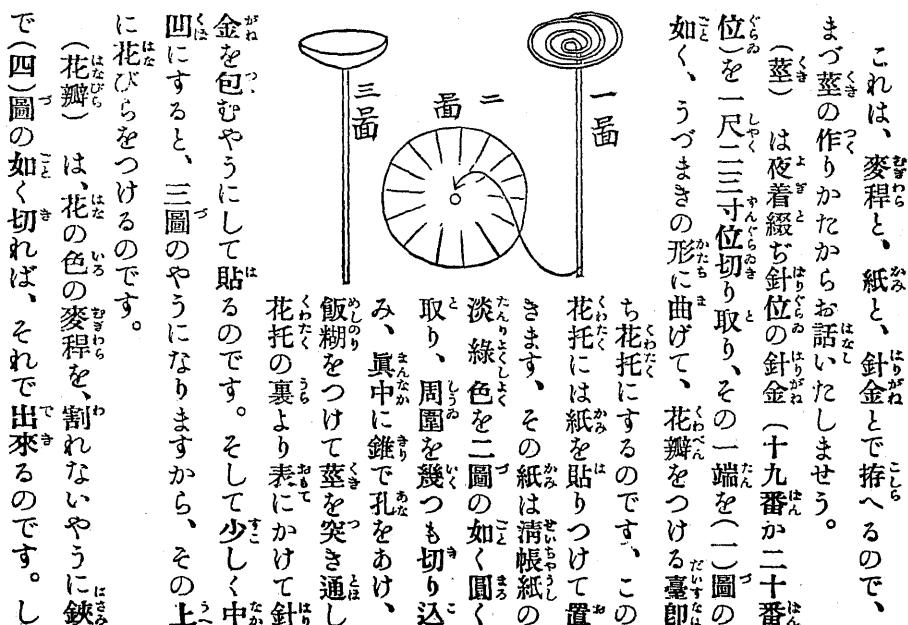
のです。

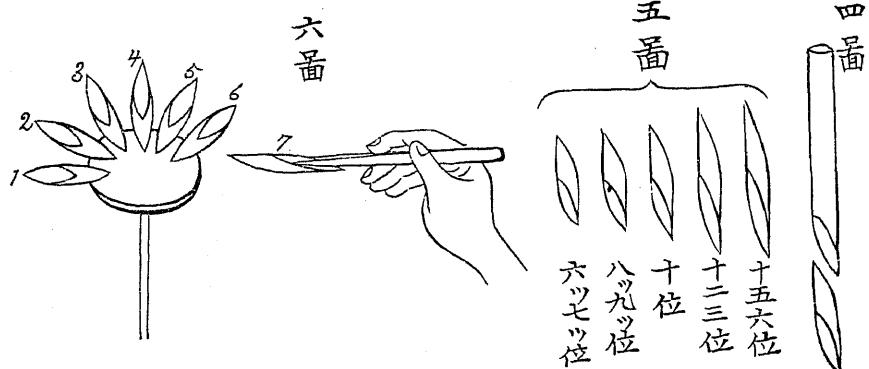
(下がり) は一番初めの圖のやうに、骨と總と鳴子とから出來てゐます。骨は竹で大小二つの輪を丈夫に作り、金紙でも巻きつけて置きます。總是五六分程に切りたる麥稈と、小さな色紙とを、一つ置きに系につなぐのです。鳴子は店に賣つて居る硝子製の金の玉の風鈴を使へばよいのですが、又、板硝子を、短冊形や菱形などに切つて拵へてもよいです。

これで各部分が調ひましたから、これらを、夫組み合せて仕上げるのです。

(仕上げ) 胴にさしてある骨竹の突き出してある所には、何れにも、先づ花車を刺し、次に豆を刺してこれを押へ、次に風車、次に又豆を刺して留めるのです、それから胴の提げ緒の下に下りを結びつけるのです。これで風鈴は出来上りました。こんどは、

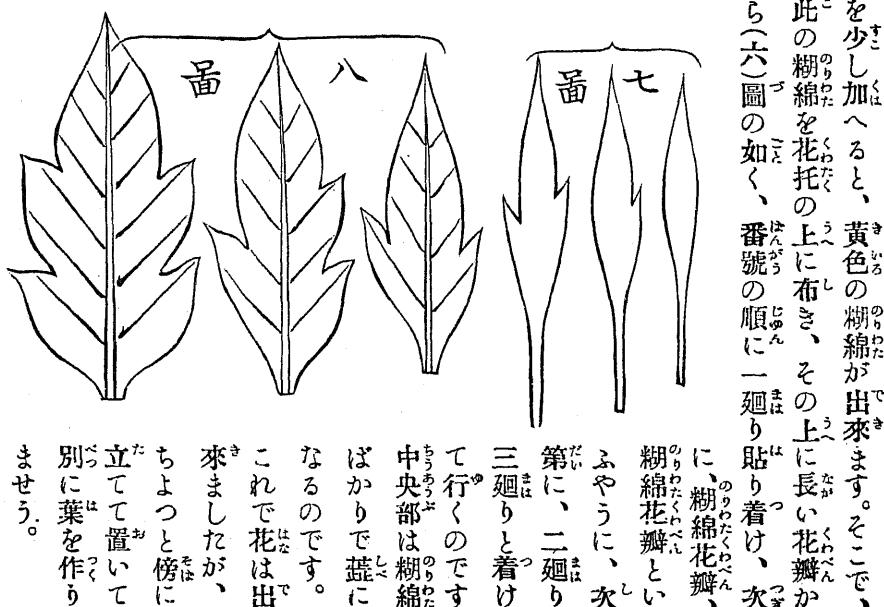
二、菊の花の療へ方

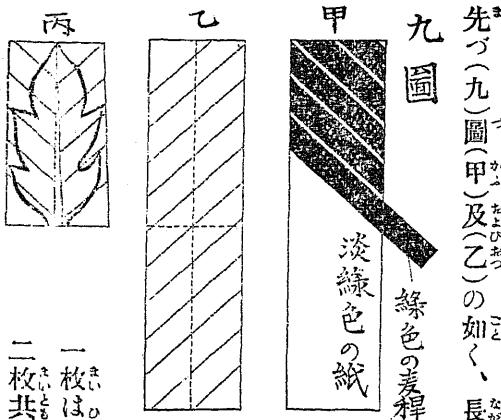




かし、(五)圖のやうに數ものやうに數も此の糊綿を花托の上に布き、その上に長い花瓣が出来ます。そこで、澤山要るし、また、大きさも澤山要るし、また、大きさも四種か五種位に大小を作らねばなりません。

花びらを花托につけるのは、糊ばかりではすぐ落ちていけませんから、綿を極小く切り刻んで飯糊に練りませ、これに、黄の染粉

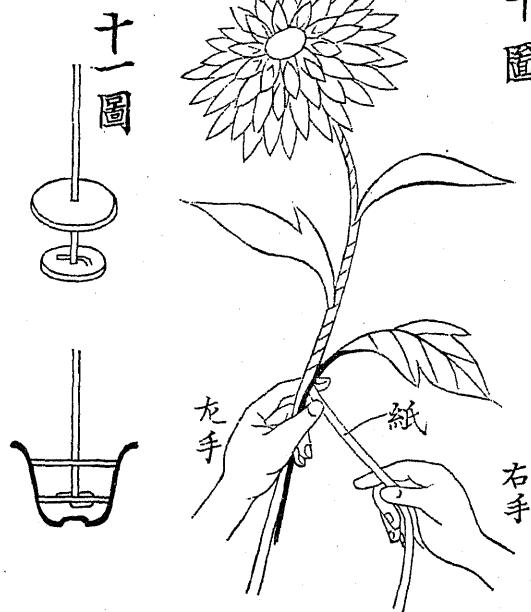




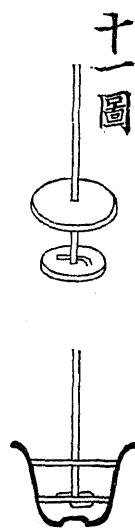
(葉)には、平たく熨した麥稈を使ふのです。その熨し方は、細筆の帽子のやうに一方を割り通し、これを廣げて板の上に押へつけ、胴切りにした竹ですりますと立派に熨ります。小さな若葉を作るのは、熨した麥稈をそのまま(七)圖の如く切ればよいですが、大きな葉は(八)圖の如く作るのです。

先づ(九)圖(甲)及(乙)の如く、長さ四寸幅一寸位の淡綠色の紙を二枚とり、こねに葉色の展ばした麥稈を一枚は右斜に、一枚は左斜に貼り、

一枚は左斜に貼り、一枚共(乙)の點線の如く、十文字に四等



分に裁ち切りて四枚とし又別の淡綠色の紙に、(丙)の如く少しく間をあけて貼り合せるのです。



そして葉の形に切り取るのです。なほ、この種の葉には柄をつけねばなりません。それは、小さな

針金に薄い緑色の紙を巻きつけ、これを適當の長さに切り、葉の裏より飯糊で貼りつけるあります。

かやうにして全部調ひましたらこれから、(十)圖の如く取り立て、仕上げるのです。

出来上つたら鉢などに挿すのです、その挿し方の一種をお話して置きませう。それはボール紙などの厚い紙を、鉢の底と口とによく嵌まるやうに二枚切り取り、真中に錐で穴をあけ、それに花の脚を挿して十一圖の如くするのです。その下の圖は鉢に挿した所を側面から見た圖です。そして上方には、砂や苔などをのせて置くのです。

客、夏休中、に大層御園に草が生えましたな。
主、はい。お蔭で子供は大喜び、摘草も出来れば「おまごと」の材料も出来、「ばつた」も住めば「こぼうぎ」も居る。まあ子供が充分遊んで踏み荒らすまでは此ま、大切に生やして置きませう。

隨感

安井哲

先頃或方のお話に、「私は何の學問も御座いませんから幼稚園の保母にでもなつて身を立てたいと存じます」といふ事をうかげひました。又近頃或方は「私も次第に年をとつてまぬりましたから、幼稚園の保母にでもならうかと思ひます」といはれました。

私は今此お二人を批評しやうと申すのでは御座いませんが、之れに就いて大に感する所がありま

すので、茲に一言述べたいと思ふのであります。

私はまだ幼稚園には素人で御座います。其故に幼兒といふ者は如何なる者で、如何に彼等を教育するのが幼稚園の任務であるかといふ様な事を、學者や先輩からうかづて見、又自分で研究しつつありますので、其結果今日では非常に貴い、非常に興味のある、研究の餘地の甚多い、且又困

難な仕事であるといふ事だけを發見致しました。其故保母といふ者は、幼兒の特性を能く了解し、其仕事の神聖である事を自覺し、又非常に子供の好きな人で、且此仕事が實に堪へられぬ程に愉快であると感する人でなければならぬと考へます。従つて保母にでもといふ様な吾仕事に對して輕蔑的の気持ちを有つて居る方は、幼兒教育には最不適任であると存じます。

やがましい理窟を申せば、凡物には他の物の關係上定められる價値と、其物自身の價値とあります。例へば召使と主人とはどちらが高い位置に居るかと申せば、申すまでもなく主人の方で御座いませず。併直に職務大事と働く召使と、高慢無禮に他人を虐使する主人とどちらが立派な人であるかと申せば、それは申すまでも御座いますまい。凡そ人の取る仕事は、其才能や趣味や又運命などで千種萬様であります、吾從事して居る仕事を自ら輕蔑してかゝる程、吾自身と及其從事して

居る仕事の發展を妨ぐる者は御座いません。例は大工は學問の點に於て工學博士に及びませんけれども、實地に於て建築上の卓越した智識を有するかも知れぬ如く、自分の職業を大切な者と思ひ、之れに興味を有てば有つ程、其仕事は高尚に感じられ且又研究の餘地が充分にある者であります。幼稚園の仕事も之れと同様であります。保母は教育者の中では或は最低の位置に置かるゝであります。又其待遇なども近年に至つて、僅に小學校の先生と同様に取扱はれる様になつたのであります。併ながら之れは學科程度の高尚な、例は大學とか、高等専門學校とか、中學校とか女學校とかに相對した場合に、其學問の程度を標準にして起つた差違で、幼兒教育其者の價が最低いといふ意味でないのは明であります。従つて之れに從事する保母は學力も少く、人格も亦低い人でよろしいといふ意味の少しもない事は無論であります。

凡そ人格の高い人が誠意を以て從事する仕事は

其種類の何たるに關せず、高尚に感せしむる者であります。況んや天使の如き幼兒を相手とする保姆にして、一度幼き心の中に潜んで居る清く美くしい者に觸れた時には、其仕事が如何に神聖に感せらるゝでありませうか。其故に幼兒の教育に從事せんと志す人は、第一位置とか報酬とか又は名譽とかいふ者にあこがれてはいけません。第二最清く貴き者を無邪氣な子供の中に認め、之れに觸れて無上の快を感じ得る者でなければなりません。第三保姆の職務は低い者でなく、實に高尚な者であるといふ事を自覺し、第四之れに從事するには學問が少ない者のためとか、又は老後の隠居仕事にとか云ふ様な自活の道を得る手近な手段としてでなく、眞に其仕事が好きで樂しみにやるといふのでなければいけません。幼稚園の仕事は高尚な學科を教へるのでありますから、子供のお守り一位は少し熟れ、ば誰にでも出来るといふ調子で、恩物の取扱や、唱歌や遊戯を形の如く

習つて、保姆の仕事は誠に容易い様に心得、最も智識があればそれで充分であるなど、考へるの誤りであります。勿論保姆は學者でなければならぬとは申しませんが、又一方に學者であるから保姆には勿體ないといふ事は決してない筈であります。之れは獨り保姆のみでなく、小學校の先生でも同様であります。立派な大學教育を受けたからとて、必しも高等の教育にのみ從事すべき者であるとは限りりますまい。初等教育に特殊の興味を有つて居る熱心家が、かかる高尚な教育を受けた方々の中から出づるのは、實に結構な事であります。次に保姆は其仕事の上から、自然に美くしい精神的感化を受くべき者ではなからうかと思ひます。即保姆は子供の如く無邪氣で打解け易い人々である筈かと考へます。何故ならば、毎日々々花の様な愛らしい幼兒の顔を眺め、鶯の様な美くしく樂しく温い心にならざるを得ません。故に極端

に申せば保母にして快活無邪氣でない者は、子供の美くしい感化を充分に受け取らぬ者といつてもよくなありますまいかと思ひます。其故に私の脳裡に書いて居る保母といふ者は、權力や名望や位置に對する慾がなく、愛と親切と献身的精神とに充ちた者であります。固より私共は聖人ではありますんから、そんなに理想通りにはまゐりませんけれども、保母として大切な事は、不知不識の間に幼児に與ふる精神的感化でありますから、保母たるんとする初に美くしい性情を養ひたいと希望すべきであり、殊に自分の相手である幼児の特性が此修養に大なる助けを與ふるのでありますから、幼児教育に從事する人々は、自然にかかる精神的影响を受くる筈であります。

私は多年幼児を友として楽しい生活を送り來られた保母の方々の幸福を祝し、併せて幼児教育に無經驗なる私が、圖らずも皆様の御指導を受けて、此樂しい生活に入らんとしつゝある事を感謝する

者であります。今回本誌編輯主任の倉橋文學士と和田實氏とが、一時的の軍人生活やら御病氣やらで、本月分の雑誌編輯を無經驗な手に御引受け致す事となり、皆様から御親切に原稿を惠まれた事を感謝し、併せて編輯上の不行届を讀者並に編輯主任兩氏に謝し、同時に「ページ」數を補はんがために、近時の所感を述べた次第であります。

主客問答

客	主	客	主	客
幼稚園の參觀が願ひたい。	ようおいで下さいました。御案内致しませう。	今は何の稽古がりますか。	今は子供が皆庭で遊んで居りますから御覽に入れませう。	それでは教室を拜見致したい。
よろしく御座います。之れが一の組の保育室で御座いま	此の黒板畫(船に野菊)は大層能く出来て居ますな、之れ	よろしく御座います。之れが一の組の保育室で御座いま	此の黒板畫(船に野菊)は大層能く出来て居ますな、之れ	よろしく御座います。之れが一の組の保育室で御座いま
ます。	は子供の手本ですか。	ます。	ます。	ます。
イ、エ、之れは秋の田野を寫した裝飾的の畫で御座い	ます。	ます。	ます。	ます。

机邊だより

倉橋惣三

○幼稚園の改良

(スタンレー・ホール氏)

第二、遊戯に就いて

フレーベルの著はしましたものに『ムツテル、ウント、コーゼ、リーデル』と云ふ本があります。これは論文集とか又は小品集とか見るべきもので決して組織的な體系を備へた教育書ではありませんが、幼児の教育に注意する人々に取つては随分大切なものです。色々の事に就いて論じて居るのであります。其の中最も注意すべきものが三つある、其れは第一は感官の練習の必要を説いたことで、第二は其の中でも筋覚若しくは運動感覚の發達と云ふことが教育上に取つて至大的關係あることを認めたことで、第三は遊戯と云ふ

手段に依つて知識的及び道德的の發達を計らうとする象徴教育を唱へたことあります。以下之れに就いて少しお話致しませう。

ヘルバートの教育説では統覺といふことが最も重く説かれて居ると云ふことは、今日最早萬人の承知して居る所で、新觀念と舊觀念の類化と云ふことが教育の目的となつて居るのであります。或る事物に就いて教授すると云ふことは、其の事物に關する觀念を、兒童が既に持つて居る舊觀念中に織り込ませて、二者を同化せしめると云ふことである、舊觀念が新觀念を類化すれば教授の目的が達せられるのである、此の事は固より大切なことではあります、然し茲に幼稚園に就いて研究しようとする吾等が當然起るべき問題は、適當な方法を以て授けられるならば、新觀念を類化し得る丈けの舊觀念を持つて居るのは其れで可いであらうが、此の舊觀念を持つて居ないものには如何したものであらうか、新らしいものを包摶して

段々自分の知識内容を豊富にして行くに、其の基礎がなくては出来ない、然るに此の根底の缺如せるもの、少なくとも極めて貧弱なものにあつては如何なる方法を講じたならば可いのであらうか、此の問題になると、既に一定の階段まで發達したもの、教育を説いたヘルバートからは、多く聞くことが出来ないのです。

此の點に関してフレーベルは、統覺の基礎として感覚の大切なことを説いたのであります、感官を通して得た感覚が精神發達の基礎であるとして統覺と感覚とを各正當な位置に置いたのである。そして感覚の中でも別けて重要なものは筋覺又は運動感覺で、幼兒の精神が周囲の事物に對して始めて起こす反應は、自分の筋肉を運かして其れ等を模倣し、了解することであると云ふのであります。

一例を取つて申しますと、此處に青年と幼兒とが始めて熊を見たと致します、此の時兩人の精神を見て直ちにすることもあらうし、又後に至つてすることもありませうが、熊の爲した所を其の儘摸倣して自から之れを爲し、以て熊を了解する

神中には此の熊に對してどういふ反應が起るでありませうか、青年は既にこれまで色々な動物を見て居ります、或は熊の繪を見たこともありませう又熊の形や大きさや性質などに就いて聞いたり讀んだりして、漠然ながらも大體の觀念を持つて居たあります、其れ故これが熊であらうと云ふことも心付させうし、又其れに似た他の動物を心中に喚び起して、熊との異同點を考へるであります、然るに幼兒にあつては、これまでに見た動物の種類も少なく、従つて熊などは見たことも聞いたこともないであります、だから自分の前に表はれた熊と云ふ新らしい動物を取り入れる丈の精神的素地が無い、然らば如何にしてこれを了解するかと申しますと、フレーベルの考に依ると、これは熊の爲す所を眞似するのである、熊を見て直ちにすることもあらうし、又後に至つてすることもありませうが、熊の爲した所を其の儘摸倣して自から之れを爲し、以て熊を了解する

のである。自分の神經や筋肉の上に同様な効力をやつて見て、始めて熊を解し、又斯くして得たものが、後の精神發達の基礎となるのである。『幼兒は何事も模倣して之れを了解しやうと思ふ』とフレーベルは云つて居ります、一言に申しますれば、幼兒の統覺は神經と筋肉との作用であると云ふのであります。

或る珍らしい音がすると、青年が此れを了解する方法は、此れを他の音と比較照して、かういふ音であるとか、又はかういふ音でないとか云ふので、之れに反して幼兒は其れと同様に音を自分で、次にフレーベルの第三の主張であります所の象徵的遊戲の價値を明かに致さうと思ふ、象徵とか符號とか云ふものは、或る具體的事物を代表する抽象的概念を云ふのである。其れ故國旗は國民的統一の象徴であり、獅子は力の象徴であります。抽象的概念は餘程發達した精神の特産で幼兒

の精神中には明晰な象徴はないのであります。フレーベルの『ムツタル、ウント、コーデ、リーデル』は前にも述べましたやうに断片的な小品集で、遊戯に關して論じて居ります所も、之れを組織的に構成して述べると云ふことは甚だ困難であります、遊戯の種類は大體之れを分つて道徳的能力を養成するものと、智識的能力を養成するものと、の二種類になります、知識的遊戯は又之れを二種に分つて、第一は自分の精神生活を寫し出したもので、第二は國民、家族、州、教會などを寫し出したものである。此れ等の遊戯を説くに當つて、フレーベルが常に怠らず主張したことは、事物間の關係を甚だ重く觀て、此の關係を遊戲に依つて代表せしめねばならぬと云ふことであります、家庭と云ふものは個々の家族員が只難然と集合したものではなくて、家族員の關係を指すのである。幼兒をして知らしめなければならぬことは、父とか母とか云ふ人々ではなくて、父と子との

關係とか、母と子との關係とか、又は家族員間の總ての關係であつて、従つて遊戯も此れ等の關係を現はして居る符號でなければならぬと云ふのである。國家に就いても又人類に就いても同様に此の關係が重要視せられて居るのです。

私は曩々にフレーベルの恩物を論じました所で、嚴密な論理の法則に従つて構成せられたものは幼児が之れを了解することが出来ないと云ひました。此の批評は今の遊戯の問題に就いても同様に妥當であります。フレーベルは自然現象や社會現象を解する上に一種の辨證法を以てして、そして此れを遊戯の上に適用し、遊戯を以て此れが符號として、幼児の好みと好みとを顧みず、此れを強ひんとしたのであります。彼の誤は要する所兒童の遊戯を解釋するに自分の哲學を以てした點に存するのである。抽象的概念は曩々にも述べたやうに幼児の到底解釋し得る所ではない、遊戯は單に遊戯として之れを喜ぶのであつて、幼児は

大人の縮少したものに過ぎないと考へて、其の中に深い自然の關係や社會關係を讀ませやうと欲するには無理である、幼児の好みのものを無理に強ひれば其の結果は幼児の自發性を害します。家族的關係などは幼児の決して解し得る所ではない、幼児は自分の母を認めるることは出来る、又母の愛も感ずることが出来る、然し其の關係を捕捉することは遙かに彼の能力以上である。

一言に申しますれば、抽象的概念を教養することの必要なことは、之れは云ふまでもないことだ、これを主張することは吾人決してフレーベルの背後に落ちるものではない、然しながら三歳より六歳に至る幼児が、抽象的概念を現はす象徴を要求するとか、又は漠然斯る概念を持つて居るとか云ふことは之れを承認することが出来ない、若し幼稚園の教師が斯る考を持つて居つたならば、其の害は恐るべきものであらうと思ふ。

次にフレーベルの遊戯論に就いて注意すべきこ

とは、彼かれは傳承的の遊戯うごきを過重視くわいしして、世の有様の變化や、周圍の事情の異なるに従つて、幼兒の精神狀態が異なり、其の結果として幼兒に適する遊戯も時と所とに依つて異なるらねばならぬことを看破しなかつたことである。其かれが爲め今はフレーベル主義を奉する幼稚園が遊戯の選擇と排列に就いて少なからず誤つて居るのであります。幼兒の興味を持たない傳承的遊戯を強ぶる結果は、單に其の遊戯に依つて折角養成しやうとした感情を養ひ得ないばかりではありません、彼等をして器械的になし、卑屈になし、奴隸的になさしめるのであります。遊戯の選擇や排列をするに當つては大人の心を持つて之れをしては宜しくないのであります、出來る丈け兒童自身の心持になつて之れをしなければならん、此れに就いて注意すべきことは色々あります、先づ物の運動を認める力は非常に早く發達すると云ふことである。同一物の色や形を認めるよりも、其の物の運動を認める力は

の方が遙かに早く發達するのである。出生後三日目に早や此の力が認められたと云ふ實例もありますが、多くの場合に於ては五週間目若しくは六週間目には既に認められるのであります。次に注意すべきことは、如何なる精神狀態も總べて其かれが運動に變化する傾向を持つて居ると云ふことで、此れは現今心理學者が等しく説く所であります、そして其の傾向が幼兒の精神に於いては特に強く働くのであります。周圍にある色々のものに就いて其の動く有様を最も早く、最も明かに認めます、斯く得られた印象は同様な運動を又幼兒の身體上に起さしめるのであつて、幼兒の精神は總べて斯る模倣に依つて發達するのである。ボールドキン教授は、模倣的本能に依つて、人格と云ふ感じが兒童の精神中に起り、兼ねて又獨創及び自發の活動が表はれるのである、即ち意志の發達は模倣に依つて始めて可能であると云ふことを、彼の『精神的發達』と云ふ本の中で説いて居ります

想像に於いても、幼兒と大人との間には二つの著しい相違があつて、大人の想像は多く物の色や形や位置の上に働くのに反して、幼兒の其れは運動の上に働く、次に幼兒の想像は其の印象が非常に強い、其の理由は、一は印象の數が少ないので今一つは其れが直接に記憶表象と密接に關係して居るからであります。以上述べました所の幼兒の諸の特徴を頭の中に置きながらフレーベルの遊戯の選擇や排列を見ると不満足な所が甚だ多いのでありますとして、今日幼稚園に關係して居られる方々は此れ等のことに就いて篤と熟考せらんことを希望するのであります。模倣をするには先づ其の物を見たり聞いたりして接近することが必要で、從つて幼兒の模倣するものは必らず彼等の周圍にあるものであります、然るに今日は幼兒の見たことも聞いたことをもないやうなものを材料として遊戯も行はれて居るのである、甚しきに至つては幼兒のみか、教師自身すらも不案内のものを探つ

た遊戯があるのであります。フレーベルは熱心な幼兒教育者で、其の主張には幾多探るべき所があり、又其の根本精神は誠に天晴な麗はしいものではありますか、彼の説いた所が、何時までも、又如何なる世界にも正しいとは云はれますまい。徒らに其の教説を墨守するよりも、學術の發達と實驗の教ふる所に従つて益々其の改良進歩を計る方が却つてフレーベルの根本精神に忠なるものであると思ふのであります。(つづく)

お園子屋とお砂糖屋

花子 何ですね、泥悪戯などにかして、ガヤガヤ、着物も前懸もこんなに泥だらけにして。

君子 花子さんお園子屋をして遊びませう。御覽なさい、こんな大きなお園子よ。

母 花子 なぜ、泥悪戯などにかして、ガヤガヤ、着物も前懸もこんなに泥だらけにして。

君子 花子さんお砂糖屋ごつこをして遊びませうか。私はこんな大きなかばや砂糖のかけを見付けて来てよ。

君子 御覽なさい、折角母様が片付けた處をこんなに散らかして、いまにお父様が御歸りになると叱られま

機嫌のよしあし

倉橋生

毎日のことである。機嫌のよしあしは免れない。或は身體の具合にも變りがある。天氣の加減もある。昨日一昨日の疲勞のぬけぬこともある。家のこと、友のこと、身のことにつけて何かと屈託もある。始終にぐぐと上機嫌でのみ居るといふことは我々凡人には中々六づかしい。機嫌の悪い時は事々ものうく、おつこうになる。常には左程にも思はぬことが、うるさくもなればいらぐと氣にも障る、まして心に心配ごともあるといふ時には、人の心配も知らないでと、ついちれつたい氣にもなる。誰れであつたか読み人は忘れたが、かういふ歌をどこかで見たことがある。

我が胸のけふの憂ひも知らずして
袖にまつはる子供達かな
お母様にさへ時には斯ういふ感じがあるといふ。

姉さんにもあるといふ。二十人三十人と多勢の幼兒をあづかる若い身には、あとでは濟まないと思ふ。ひながらも、つい起り易い感じである。保母諸君とて幼稚園のみに活きて居る人ではない。親もあり、弟妹もあり戀もあらう身の、小さい胸につゝみ切れぬ物案じは誰れにでもあることである。教職の畏さをよく知ればこそ、抑へてこそ居れ、強ひて忘れようとこそ努めて居れ、秋を知る遊園の立木の蔭に、ふと憶ひ出で、そつと涙をふく様のこともある。今朝は不思議に折れては折れる青色「チョーク」に病人の容態が氣にかかり出す様のこともある。けれども笑まねばならぬのである。聲張りあげて唱はねばならぬのである。右から左から繩る幼兒に一年三百六十五日同じ機嫌で居なければならぬのである。

こゝろ内にあれば色々とにあらはる。之れは是非ない當然であらう。包める程の思ひならば誰れとて外には漏さぬ筈である。それを包めといふは

素より無理と知つての注文である。切ない思ひ努力である、併しその無理も切なさも幼兒の爲といふことを思へば、強ち出来ぬ我まんでもあるまい。否、出來ても出来ぬでも是非しなければならぬ我まんである。つゝむに餘る心の思ひは、泣くには泣くべき處である。訴へるには訴へる處がある。何も知らぬ幼兒の明るい心に、そのうす暗い翳をだに投じてはならぬ。昨日に同じ温さを求めて來る幼兒に、一滴の冷さをだに點じてはならぬ。心悲しくば尙更幼兒にやさしくしてやれ。心淋しくば尙更幼兒を抱きしめてやれ。心よかせにすげない言葉使をしたり、味ない佛頂面を見せたりしては、それはもう我まゝといはれなければならぬ。たしなみのない、つゝしみのない氣まゝ氣隨といはなければならぬ。前の歌を目にして見

己れに充つた強い優しさにあるのではないか。そこに初めて浹々とした詩の味が成るのである。假りにもうるさいと袖を拂ふすげない、素振の一つだにあつたとしたら、そのうるさいは察しこそすれば、美しい詩はこはれて仕舞ふ。

併し、之れはまだ修養の途中である。もう一段の修養を積んだ人には、此の一々の切なさが無くなるのであるらしい。その場々々に心の鬪をして努めて己れに充つ要もなく、それが心の自然になるものであるらしい、心の内にはどの様の苦勞があつても、足一とたび幼稚園の門に入り、耳に幼兒の聲を聞けば、そのまゝ活きくと心をおこすものであるらしい。そして如何なる時と雖も、不斷の慾色を顔に湛へて居られるものであるらしい此の聖に近い常性を得度いのは、切々と心を練る我等の修養の目あてである。今はたゞ其の途中、せめて我まゝから不機嫌をつゝしみ度い。切角可愛い、子供達の傍に居て、心に子供を拒ける様